

書を抱えてフィールドに出よう!



感染症の歴史学

著 者：飯島 渉

出版社：岩波新書 2024年 1月発行

した本書は、サイズは新書版ですが、重厚な書籍に匹敵する重みがあります。

21世紀の新興感染症としてCOVID-19を取りあげ、天然痘、ペスト、マラリアについて歴史学の視座から書かれています。医療者にとっては、感染症学で学習した病気の解説とは大きく異なる語り口が新鮮に映ることと思います。

私にとっては、パンデミックの資料、記録、記憶を残すという強い主張に感銘を受けました。新型コロナの流行という「大きな歴史」と同時に、一人一人の生活を描く「小さな歴史」を集め、歴史を叙述することが必要だという著者の意見には全面的に賛成です。

一方、本書が教えてくれたのは、「ファストトラック」という検疫手続きのための質問票データがすでに自動的に削除されているなど、日本政府の個々の組織における粗末な対応です。社会全体に大きな衝撃を与えたパンデミックだからこそ、適正な費用負担をしたうえで、かけがえのない歴史的事実をきちんと残し、その評価は後世に委ねるという社会的なコンセンサスが求められています。本書を読了して、医学や公衆衛生の本格的な博物館が日本にも欲しいと心から実感しました。

(紹介者：中村安秀)

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックは、いままでは歴史とは無縁の世界に生きていた多くの医療者に、歴史から学ぶことの重要性を教えてくださいました。中国のマラリアやペストに関する医療社会史の碩学として知られる著者が、パンデミックから受けた衝撃を歴史学の視点から見事に分析



国際協力を学ぶ人のために

著 者：内海成治(編)・桑名 恵(編)・杉田映理(編)

出版社：世界思想社 2024年5月発行

ことができます。国際協力とは何かという基本から始まり、国連やNGOなど多様なアクターの視点から各分野の紹介、そして国際協力に求められる「変革」について解説されています。特記すべき点としては、ファンドレイジングや日本国内における難民支援など、今まであまり語られることのなかった日本国内での国際協力についても述べられていることです。国際協力の「現場」は途上国だけではなく、日本国内にも「現場」があり、地球市民として多様な方法で、誰でも、どこでも国際協力に参加できることを教えてくださいました。

本書はまさしく、「より良い世界のために」と様々な分野で模索してきた先人

の努力と叡智が詰まった国際協力を志す者へのバイブルのような一冊です。本書を読み進める中で、私自身がどの分野が好きで、どの分野の知識が足りていないのかを知ることができました。初めて国際協力を学ぶ方にももちろん、既に国際協力の現場で奮闘している方にもおすすめです。

この「書を抱えてフィールドへ出よう!」の言葉通り、私も時に辞書のように、時にお守りのように本書を抱えて、今JICA 海外協力隊としてマダガスカルで国際協力を見つめています。

(紹介者：福井妙恵)

「国際協力は誰のものか。」(p.31)という内海先生の言葉が胸を打つ。残念にも、本書が内海先生の遺作になってしまいました。目を輝かせながら内海先生がご自身の研究についてお話しされた時、未熟な学生ながらに憧れのようなものを抱いたことを思い出します。

本書を通して、複雑化した世界と国際協力を通じた人類の努力を深く理解する